十和田の夏霧

泉鏡太郎

青空文庫

彼處に、遙に、湖の只中なる一點のモーターは、日の光に、たゞ青瑪瑙の瓜の泛べる風情がある。また、行く船の、さながら白銀の猪の驅けるが如く見えたるも道理よ。水底には蒼龍のぬしを潛めて、大なる蟒蟒の影の、藻に亂るゝ、と聞くものを。現に其處を漕いだ我が友の語れるは、水深、實に一千一百尺といふとともに、青黒き水は漆と成つて、梶は辷り櫓は膠し、ねば〳〵と捲かるゝ心地して、船は其のまゝに人の生えた巖に化しさうで、もの凄かつた、とさへ言ふのである。私は休屋の宿の縁に――床は高く、座敷は廣し、襖は新しい――肘枕して視めて居た。草がくれの艫に、月見草の咲いた、苦

掛船が、つい手の届くばかりの處、白砂に上つて居て、やがて蟋蟀の閨と思はるゝのが、數百一群の赤蜻蛉の、羅の羽をすいと伸し、すつと舞ふにつれて、サ、サ、サと音が聞こえて、うつゝに蘆間の漣へ動いて行くやうである。苦を且つ覆うて、薄の穗も靡きつゝ、旅店の午は靜に、蟬も鳴かない。颯と風が吹いて來る、と、いまの天氣を消したやうに、忽ちかげつて、冷たい小雨が麻絲を亂して、其の苦に、斜にすら〳〵と降りかゝる。すぐ又、沖から晴れかゝる。時に、薄霧が、紙帳を伸べて、蜻蛉の色はちら〳〵と、錦葉の唄を描いた。八月六日の日と覺えて居る。むら雨を吹通した風に、大火鉢の貝殼灰——これは大降のあとの昨夜の泊りに、何となく寂しかつた—

―それが日(ひ)ざかりにも寒(さむ)かつた。

昭和五年十一月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集　巻二十七」岩波書店
　　1942（昭和17）年10月20日第1刷発行
　　1988（昭和63）年11月2日第3刷発行
※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。
※表題は底本では、「十和田《とわだ》の夏霧《なつぎり》」とルビがついています。
入力：門田裕志
校正：川山隆
2011年8月6日作成

青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

十和田の夏霧

泉鏡太郎

２０２０年　７月１３日　初版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　http://aozora.xisang.top/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/